〔新収品紹介〕

絹本著色楊柳観音図　朝鮮・高麗時代

当館ではこのたび、高麗時代の絹本著色楊柳観音図を購入いたしました。この仏画は、昨年の特別展「高麗仏画」に出陳されておりましたので、展観をご覧になられた人で、記憶されている方もあるかと思います。この作品はそのときの展示品のなかでも、造形的にすぐれ、ひときわ光彩を放っていました。皆様もその高い気品と洗練された美しさに、きっと深い感銘を受けられたことでしょう。

この楊柳観音図は最近発見されたもので、画面の法量は竪100.4cm、横49.6cmで、他の高麗仏画と比べてさほど大きくありません。ただ、画面右上の一角の絹地が竪約19cm、横約35cmにわたって欠落しているのは惜まれます。しかし、そこには何も描かれていなかったと推察されます。むしろ、この仏画の主要なところが、ほとんど剝脱せず、よく保たれていたことは奇蹟的といえましょう。

さて、この作品を見ますと、画面中央の岩座の上に、観音は正面を向き、左足は海中より生じた蓮華を踏みさげ、右脚は左膝に組みあげた、いわゆる半跏（はんか）の姿勢で坐っています。高麗の楊柳観音図の多くは観音が斜め向きで坐っており、この正面向きで坐る例は珍しいといえます。

この観音の上半身はほとんど裸に近く、肌色をしており、両肩が張り、胸幅が広いので、男性のがっしりした体軀を思わせますが、しかし、その胴部の極端なくびれや細長く伸びた華奢な両腕の表現には女性のそれを感じさせるものがあります。また、その指先の長い手の自然な動作や上半身をほんの少し右に斜けて、あたかも私たちに会釈を送っているかのようなポーズには、菩薩といった宗教的な堅苦しさはなく、むしろ人間的な親しみやすさが感じられます。

観音の相貌はやや正方形に近いかたちで、頬から顎にかけて円味をもっているのが特徴で、秀麗で威厳にみちています。観音の頭部は金色の頭光の輪が囲み、朱衣の化仏をつけた宝冠を頂いています。宝冠を包んで左右に垂れる白い天衣は、幅の狭い帯状のもので、これは頭の左右から両肩の前にかかり、腕を大きく一巻きして、それぞれ岩座の先端を巻き込むようなかたちで外側に流れ出ています。また、瓔珞にとりつけられた朱色の飾り紐も、白い天衣とからみあいながら同じように岩座から流れ出ています。この天衣と飾り紐は曲線の流動的な美しさを見事に表現しており、印象的であります。また、観音の赤い裳に施された金泥の七菊花組合せ丸文は、華やかで気品があり、高麗仏画特有の装飾文様であります。

さて、観音の右後方の岩の上に、楊柳の枝を挿した水瓶が置かれています。この観音が、「楊柳観音」と呼ばれているのはそのためです。これには本来、「楊枝浄水」という宗教的な意味が含まれています。

一方、岩座の下を見ますと、蓮華や赤い珊瑚や色とりどりの宝珠が散在しています。そしてその周囲は、水墨で海波があらわされています。岩座の前面に広がる海上には善財童子が小さな蓮弁の小舟に乗り、腰を少しかがめて合掌しています。その天衣は観音のそれと同じように、風に強く翻っており、海風の激しさが知られます。

つまり、この作品では、主要モティーフの観音と善財童子があざやかに彩色されて、海と空をあらわす暗褐色(？)の背景の中から、はっきりと浮き上がって見えるように描かれているといえます。

ところで、この作品は善財童子が岩上の観音を礼拝する情景を描いたものと解釈されます。この作品の図像学的典拠になったものは、『大方広仏華厳経入法界品』であります。この「入法界品」とは純真無垢の善財童子が文殊菩薩の指示に従って、南方に向って順次に五十四人の善知識を歴訪し、最後に普賢菩薩のもとで大乗の行願を体得するという話です。そのなかで、善財童子が二十八番目に補怛洛迦山（ほだらかせん／ポータラカ）の観音浄土に親しく参問する様子が述べられています。

朝鮮の長い歴史を通じ、高麗王朝（918～1392）は統一新羅王朝をうけついで仏教の隆盛をみた時代であります。高麗は不断に外敵（歴史的には契丹、金、蒙古）の脅威にさらされ、また侵略を受けてきましたので、その仏教はおのずと王室を中心とする護国的な性格を帯びたものでありました。

一方、このような仏教のなかで、観音信仰は広くあらゆる階層にわたって行われたもので、この信仰は新羅以来の民間信仰と深く結びつき、各地の観音霊場（例えば、江原道通川の金蘭窟、江原道襄陽の洛山寺観音聖窟など）を中心として盛んに行われたところに特色があります。文献を見ますと、彼らは観音を豊穣と授子の菩薩として崇拝していたことが知られます。

高麗の楊柳観音図は、そのような民衆の観音信仰を基盤として、当時友好関係にあった北宋の絵画様式の影響をうけて、生まれたものと考えられます。それは中国や日本とは違った高麗独自の観音像であります。この大和文華館の「楊柳観音図」は、そのような高麗楊柳観音図の代表的な例といえ、その制作年代は13世紀中葉ころと推察されます。

改めてこの作品を見ますと、善財童子は観音を礼拝しているはずなのに、その方向へは顔を向けていません。この画家は善財童子のあどけなく澄みきった容貌をあえて私たちに見せようとしているともうけとれます。風浪を恐れず、身命を顧ず、観音を見たてまつろうと願う者にのみ、観音は端厳な慈悲の相をもって示現するということを、善財童子の落ち着いた静かな表現を通して示そうとしたのではないでしょうか。

この「楊柳観音図」は、たしかに見て楽しく、鑑賞的にもすぐれた作品といえますが、しかしそれ以上にきわめて高い宗教的表現をもった作品ということができます。（林進）

季刊 美のたより No.48
昭和54年8月29日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.